

海底一万メートルのレジ袋

高崎市立大類中学校

三年 曾根 明依

あなたは知っていますか。レジ袋をネットレスにして泳いだり、胃袋からプラスチックを出したりする、ユニークな動物がいることを。では彼らの出身地はアフリカ？それとも東南アジア？

いいえ、世界中です。では、希少生物でしょうか。それも違います。どちらも、かつてはふつうのウミガメと海鳥でした。私たちがもつと気をつけていけば。

昨年、レジ袋の有料化が始まり、私はそれに至るまで何があったのかに興味を持ち、自由研究のテーマにしました。みなさんは「海洋プラスチック」という言葉聞いたことがありますか。私達は、年間ジェット機5万機とほぼ同じ重さのプラスチックを出し、海に流出させています。ある調査では海底約一万メートルに、レジ袋が落ちていたという報告もあります。プラ

スチックは分解されるまでに何千年もかかるため、海に一度流出したプラスチックは砕かれ、いくつかに分かれながらも海を漂い続けます。これが海洋プラスチックです。しかし、本当の恐ろしさは海洋生物が風化して細かくなったプラスチックを食べてしまうことです。彼らの胃にたまったプラスチックは消化されずとなく残り、栄養を取り込めなくなりやがて死をもたらします。

これを聞いても最初は自分たちが動物を苦しめているという実感がありませんでした。そこで近くの大きな河川敷へ行き、どんなゴミが落ちているのかを調べました。近所の子ども達が一生懸命にサケの卵を育て、放流するボランティアが毎年行われている、私の思い出が詰まった場所です。懐かしさを噛みしめながら歩いていくと、そこにあつたのはなんと数々のゴミ。ペットボトル、包装紙、ストロー。私はとてもショックを受けました。思い出の川に投棄されたゴミは、海洋プラスチックの問題をどこか他人事のように捉えていた私に、一気に現実を突きつけてくれました。

「ポイ捨てはいけない。」「プラスチックを減らそう。」

というありふれたポスターを見てみなさんは何を思い
ますか。「どうせ自分だけやっても世界は変わらないの
では。」と書いていませんか。実はその通りです。海洋
プラスチック問題は一人の力ではどうにもならないと
ころまでできています。だからこそ、この現実を世界中
の人々が知り、危機感を持ち、「このままではいけな
い。」と意識して行動に移すことが大切だと思います。

実際にプラスチックの影響が私達の生活を脅かしつ
つあります。海で小さくなったプラスチックをプラン
クトンが食べ、それを魚が食べ、その魚もまた私達が
いただきます。このまま何も変えずに過ごしてしまう
と、二〇五〇年には魚より海に流出したゴミの方が多
くなってしまう。私達より少し後に生まれた子達
が、青く透き通った海も、にぎわう砂浜も知らないま
ま大人になっていくかもしれませぬ。私達はそんな未
来に希望をもてるでしょうか。このような事実を少し
でも知る人が増えれば、危機感をもつ人も増えるので
はないでしょうか。

私はこの問題を知り、少しでも未来を変えるために
家ではペットボトルを極力使わず、洗剤なども詰め替

え用を買い替えます。家の風呂場では見慣れたシャンプー
容器がゴミにならずに使われています。「当たり前」と
言われればそれまでですが、この「当たり前」が世界
に広がってゆけば、未来は変わると信じています。

二〇一九年には環境省が「海洋プラスチックごみ対
策アクションプラン」を策定しました。世界では、た
くさんの取り組みがなされていますが、何よりも大切
なのは、もつともつと多くの人々が「このままではい
けない。」と意識することだと思います。

人類は約百年前、低コストで画期的なプラスチック
という物質を作りました。それにより、文化や経済は
発展しましたが、大切な自然を失いつつあります。そ
れを私に教えてくれたのは、思い出の川に投棄された
ゴミや海底一万メートルに沈むビニール袋でした。

プラスチックゴミを分別しないで多くの命を奪うか、
リサイクルボックスに入れて環境を守るかはみなさん
の手にかかっています。

プラスチックゴミを出さない事が、未来の地球のた
めだと思って、私達で小さなことから始めませんか。